

「新しいライフスタイルの構築による海洋プラスチックごみ問題の解決」議事要旨

(開催要領)

1. 開催日時：令和2年12月18日(金)13:00~15:45
2. 場所：ボルファート富山
3. 登壇者：
環境省 海洋プラスチック汚染対策室 室長補佐 飯野暁
富山県 生活環境文化部 環境政策課長 鷺本洋一
公益財団法人 環日本海環境協力センター (NPEC) 調査研究部長 吉森信和
富山市環境部 環境政策課 主査 五十嵐勇磨
富山県婦人会 会長 岩田繁子
株式会社富山環境整備 リバース事業部 部長 谷島篤
一般財団法人日本環境衛生センター 研修事業部・SDGs 担当 事業推進役 鈴木弘幸

(プログラム)

1. 開会挨拶 鷺本洋一
2. 施策説明「海洋プラスチック問題に対する環境省の取り組み」飯野暁
3. 講演①「日本海・富山湾における海洋プラスチック汚染の実態」吉森信和
4. 講演②「発生抑制モデル事業（網場の設置運用）について」五十嵐勇磨
5. 講演③「美しい地球を次世代に ～力繋いで地域に根ざした活動を～」岩田繁子
6. 講演④「プラスチックのマテリアルリサイクルについて」谷島篤
7. パネルディスカッション
「ライフスタイルの変革、with コロナ、一人一人が出来る取組」
ファシリテーター 鈴木弘幸
パネリスト 飯野暁／吉森信和／五十嵐勇磨／岩田繁子／谷島篤
8. 閉会挨拶 飯野暁

* 敬称略・順不同

1. 開会挨拶

今日、地球温暖化や海洋ごみなど地球規模の環境問題に直面しており、特に近年ではプラスチックによる海洋汚染が喫緊の課題として大きく取り上げられています。

日常生活のあらゆる場面で利用されるプラスチックはポイ捨てされたり、屋外に放置されたりすると雨や風により海に流れ出てしまいます。海洋プラスチックごみ問題は、私たちの暮らしや事業活動に密接に関わっており、地球、国レベルの対策と併せて各地域、自治体での取り組みを進めていくことが重要です。このシンポジウムを通じて海洋プラスチック

ごみ問題をご認識いただき、今後の行動につなげていただければ幸いです。

2. 施策説明「海洋プラスチック問題に対する環境省の取り組み」

海洋プラスチックごみをそのまま放置し続ければ、2050年には魚の量よりも、プラスチック流出の累積量が多くなると予想されています。

SDGsの目標14「海の豊かさを守る」を達成するため、昨年6月に開催されたG20大阪サミットで、2050年までに海洋プラスチックごみをゼロにするという「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」が共有されました。一方、パリ協定では2050年までに温暖化ガス排出ゼロという目標が掲げられています。環境省では「プラスチック・スマート」と「クール・チョイス」という2つの国民運動を積極的に推進し、この2つの目標を達成していきたいと考えています。

3. 講演①「日本海・富山湾における海洋プラスチック汚染の実態」

NPECは日本海・黄海の海洋環境の保全のために設立された組織です。国連や政府と連携した活動のほかに、地方自治体、市民と連携した活動を行っています。海辺の漂着物調査はその一つで、1996年頃から調査を開始し、24年間に4カ国38自治体245海岸で実施し、約4万人の市民が参加しました。日本海の海岸ごみの9割がプラスチックごみで占められており、海洋ごみ問題は海洋プラスチックごみ問題と言えます。海洋プラスチックごみは国境、県境を越えた課題であり、関係者全体で取り組むべきものです。

4. 講演②「発生抑制モデル事業（網場の設置運用）について」

令和元年度から重要河川や農業用水などにおいて、網場の設置による試験を行っています。令和元年はごみが発生する可能性が高い5つの河川を選定し、5日間、9時から15時まで網場を設置し、ごみを回収しました。5つの河川で回収したごみの総重量は569kgで、プラスチック類は49kgでした。49kgはペットボトルに換算すると、1633本分に相当します。ごみの回収に人手がかかる、網場の構造上河川の流れを阻害するなど、解決すべき課題はありますが、他の自治体にも水平展開できるよう研究していきたいと思えます。

5. 講演③「美しい地球を次世代に ～力繋いで地域に根ざした活動を～」

富山県婦人会は1947年に発足。「安心安全な地域創造に努めよう、地域に根ざした活動を」をスローガンに、さまざまな活動を行っています。

平成9年からマイバック持参運動に取り組み、平成20年4月1日に県下一斉レジ袋無料配布取りやめをスタートさせました。当初からマイバッグ持参率は90%を越え、平成25年からは95%の持参率を維持しています。この富山方式が支持され、令和2年7月1日より全国でレジ袋の有料化がスタートしたことは富山県としては大きな喜びでした。令和3年1月にはコンビニでも使える小型マイバッグを作成し、さらなる推進をする予定です。

6. 講演④「プラスチックのマテリアルリサイクルについて」

当社は廃棄物処理だけではなく、プラスチックのリサイクル原料化などのリサイクルプロダクト事業、廃棄物由来のエネルギーで農産物を作るアグリ事業を展開。サーマルリサイクルの発電量は5メガワット、社内で利用する電気量の約50%を発電しています。

当社の最大の特徴はこれらの事業を同一敷地内で行っていること。リサイクルには選別が重要になるため、プラスチックごみ選別化の高度化にも取り組んでいます。

7. パネルディスカッション

「ライフスタイルの変革、with コロナ、一人一人が出来る取組」

①吉森

海洋プラスチックごみへの意識を高めるために、平成19年度より漂着物のアート展を開催しています。楽しく学習しながら、理解を深めていけるので好評です。これらの取組などもあり、富山県では海洋ごみの認知度が向上しました。これからは知ってもらう活動ではなく、対策について市民のみなさんと一緒に考えていく機会を設けることも考えています。

さらに漂着物だけではなく、マイクロプラスチックの調査も強化したいです。環日本海地域の広域を調査するため、日本海沿岸の国内外の自治体と対話の機会を設け、進めていきたいと思っています。

②飯野

富山市の網場の設置をはじめとする海洋ごみ削減のための自治体による発生抑制対策等モデル事業での成果を、とりまとめて全国に発信していくことを考えています。

2050年までプラスチックごみの流入をゼロにするためには、プラスチックごみを回収してきちんと処理することが必要です。ワンウェイのプラスチックを使わない、ごみを分別して出す、マイバッグを持参するなど、普段の生活の中で心がけていただきたいと思っています。

③五十嵐

富山市はSDGs未来都市にも選定していただいております、モデルとなるような都市づくりが求められています。循環型社会を築くためには、行政だけではなく、市民、研究機関、企業などそれぞれが役割を担う必要があります。市役所では市政の情報を積極的に提供する出前講座を実施しています。その中には海洋プラスチックごみ問題をテーマにしたものもあります。このような機会を利用して、積極的に市民の皆さんに伝えて教育、啓発につなげていきたいと思っています。

④岩田

これまでの活動の中で最も苦勞したのは、ごみを分別して出すための仕組みづくりでし

た。リサイクルセンターができた当時、見学に行くと、家庭から出されたごみの袋には普通ごみに瓶や缶などが混載されており、センターの人たちが人力で分別していたのです。ごみは出す側がもっと責任を持って出さないといけないと、市民のみなさんに訴えました。それから市町村の指定袋が始まり、今のような分別収集につながりました。

⑤谷島

ごみをちゃんと捨てるという意識はあるのですが、分類が難しいという現状があります。どうすれば資源として有効活用できるのか、自治体の収集のスキーム、分別のルールも合わせ、処分の流れを整備していくことが重要だと考えます。当社は現在、マテリアルとサーマルを主体にリサイクルに取り組んでいます。今後はケミカルリサイクルも取り入れ、最終処分場の延命を図りながら、低炭素社会を実現するために邁進していきたいと思えます。

8. 閉会挨拶

富山は環境の分野、ごみ問題の分野では日本全体をリードする地域です。この富山で培った知恵を日本全体で共有していければと思っています。明日から生活、事業、地域活動の中で、プラスチックごみ問題取り組む際、ぜひプラスチック・スマートを参考にしてください。

以上